

第三部 第4巻～第6巻

尾崎名津子

1 『貼雑年譜』第4巻～第6巻の概要

『貼雑年譜』第4巻は1946（昭和21）年1月から1950（昭和25）年12月まで、第5巻は1951（昭和26）年1月から1954（昭和29）年12月頃までの、新聞や雑誌の切り抜き、パンフレット、葉書、乱歩自筆のメモ、謄写版の印刷物などが、おおむね時系列に即して貼られている。第6巻は、冒頭の数頁に、第5巻に収められなかった1954年6、7、8、9、11（乱歩による推定）、12月の記事が貼られているが、それ以降は再び1955（昭和30）年1月から1957（昭和32）年7月までのもので、編年的に構成されている。

敗戦以後の昭和20年代をそのまま包含するのが第4巻～第6巻となる。『探偵小説四十年』の後半部分（「探偵小説復活の昂奮——昭和二十一年度」以降）にそのまま該当する。『貼雑年譜』を見る愉しみの一つとして、『探偵小説四十年』の記述との照合ということもあり得るだろう。ここでも『探偵小説四十年』（以下『四十年』と表記）や、その記述を踏まえて中島河太郎が構成した「江戸川乱歩年譜」（『江戸川乱歩推理文庫65 乱歩年譜著作目録集成』講談社、1989年5月。以下「年譜」と表記）を主に参照しつつ、『貼雑年譜』第4～6巻の内容を紹介したい。

2 私人としての側面

『四十年』の46年10月の項に「物価統制が乱れるのを防ぐために、東京の各区に二十名内外の物価監視委員というものが置かれ、私は豊島区の委員の一人に任命された。」とある。このように、『四十年』には探偵小説作家・江戸川乱歩の出来事に加えて、平井太郎としての仕事も書き込まれている。もっとも、それぞれの仕事において両者がそれほどきれいに弁別されるわけではない。乱歩の仕事か、平井太郎の仕事かというのは、作家・江戸川乱歩の地歩を既に固めたと言うべきこの時期にあっては鶏と卵の話のような問題であり、弁別に情熱を燃やすことは却って無粋である。しかしながら、行政との直接的な関わりにおいては、筆名を棚上げした状態、すなわち平井太郎名義で臨む必要が、多くの場面で出てくる。

『貼雑年譜』第4巻には謄写版の「豊島区物価監視委員名簿」が貼付されていて、メンバーが「消費者」と「商工農業者」とに腑分けされている（4_014）。このうちの「消費者」の一人に「平井太郎」の名前がある。この資料が『四十年』の記述の根拠となる、いわば一次資料としての役割を果たしていることは明らかだ。このような行政文書類の写しが、『貼雑年譜』にはふんだんに貼付されている。

物価監視委員の例のように、平井太郎としての仕事は主に池袋や豊島区、東京都でのものがほとんどを占める。時期の順に挙げれば、以下のようなものがある。

豊島区長・藤岡和二郎からの手紙（1946年10月3日付、4_015-1）

「平井会計幹事殿」と宛名が書かれた「池袋三丁目北町会役員及隣組長名」(1947年1月1日付、4_029)

「池袋三丁目協同販売利用組合」の理事会の「御通知」（1947年3月28日付。ここで平井太郎は「幹事」となっている。4_038）

東京地方裁判所長・西久保良行の名前で刷られた、東京家事審判所参与員ならびに調停委員を選任する葉書（1948年2月2日付、4_069）

豊島区役所庁舎建設協賛会理事の委嘱状（1948年6月10日、4_077）

豊島区の学校教育施設再興に協力したことに対する、当時の豊島区長・須藤喜三郎の名前による「感謝状」（1949年11月3日、4_113）

豊島簡易裁判所庁舎建設への協力に対する、豊島簡易裁判所裁判官・近藤春雄ならびに豊島簡易裁判所庁舎建設協賛会会長・須藤喜三郎の名前による「感謝状」（1950年4月26日、4_140）

池袋経済懇話会理事の委嘱状（1951年6月6日、5_012）

豊島公会堂建設への協力に対する、豊島区長・須藤喜三郎ならびに東京都豊島公会堂建設協賛会長・上原正吉の名前による「感謝状」（1952年10月29日、5_051）

都政懇談会の席次表（1953年11月26日、5_087）

都議選の候補となった竹内雷男（日本社会党公認）のポスター（推薦者に乱歩の名前がある。他には鈴木茂三郎、岡田宗司、神近市子、高野實、三角寛。）（1955年4月、6_032）

また、上に挙がらないものとして、公職追放に関する資料が3点ある（第4巻所収）。それらを以下に示す。

(1) 「証言」と題された謄写版（1947年12月10日付、4_061）

「昭和二十二年勅令第一号第七条ノ二第一項の規定により大政翼賛会豊島区支部事務長たりし理由に基き覚書に掲げる条項に該当するものとして昭和二十二年十月十四日仮指定書を受領致しましたが右は単なる名目上の事務長に過ぎなかつたのであります」と書き出されている。事務長に就任した際の状況や事情について具体的に書かれている。事実を摘記したもので、自身の思想信条については筆が費やされていない。行政文書として要を得たものである。

(2) 「調査表」の控え（1947年11月30日、4_062-1）

表紙の右上に、「控」と乱歩の筆跡でペン書きされている。冊子体で15頁にわたり、必要な内容を記載する形になっている。

(3) 東京都知事名による「確認書」（1948年2月27日付、4_062-1）

公職追放に「該当する者でない者であることを確認する」もの。

以上の3点について、性急に意味付けることは慎む。ここでは、『四十年』の「昭和二十二年」の章に、次の記述が既にあることを書き添えておく。

【十二月】わたしは戦争中、大政翼賛会豊島区事務長であった理由により追放を指定されたので、不服を申し立て、翌二十三年二月、追放を解除された。

なお、中島河太郎の「年譜」にも同趣旨の事項が書かれている。『貼雑年譜』の当該の資料は、これらの記述をあとづけるものである。

3 実社会で推理する

『四十年』や「年譜」、また、「幻影城通信——城外散策——」（初出『寶石』1947年1月、所収『江戸川乱歩推理文庫 60 うつし世は夢』講談社、1987年9月）にはかなり詳細に記述されているが、GHQ/SCAPの占領期に乱歩をはじめとする探偵作家たちは、警察や検察と直接関わる機会が増えていた。実社会で起きる凶悪犯罪について、犯人像や動機などの推理をするようになったのである。その端緒は1946年10月、神奈川県老人殺しの捜査会議に呼ばれ、意見を求められたことにある。

『貼雑年譜』にもそのことが確認できる。第4巻に貼付された「探偵作家刑事探偵座談会席次」（謄写版、「昭和二十一年十月十八日 於横浜地方裁判所検事局」と明記されている。4_023）がその第一のものである。それ以降、乱歩は実際に推理した事件の新聞記事を貼りこんでいった。その事件を挙げれば以下の通りである。事件の名称は貼られた記事の見出しによる。

第4巻：小平事件、五十万円麻酔強盗事件、帝銀事件

第5巻：八宝亭事件、探偵作家クラブ会員が実母を惨殺（乱歩自身は談話で「推理小説作家クラブ」と述べているが、記事では「探偵作家クラブ」と表記されている。）、巢鴨の通り魔、バラバラ殺人、下山事件、メッカ殺人、運転手殺人

第6巻：血染めのオーバー事件

これらの中には、乱歩自身のコメントが記事の中に含まれないものもある。それらは、実際にメディアに向けて見解を示したもののそれが掲載されなかっただけか、あるいは、乱歩が個人的な関心に基づいて貼り込んだものかを区別することが難しい。今後の研究の進展が待たれるところである。

併せて、それぞれの時期における凶悪犯罪の特徴や傾向についての寄稿や談話も多く採録されている。アプレゲールと犯罪、凶悪犯罪の被害者としての女性たち、凶悪犯罪者に協力する女性たちについてのものが目立つ。これらからは、その時どきの乱歩の犯罪観も析出できるだろう。

4 「大御所」になる

第4巻では、探偵作家クラブや捕物作家クラブの結成に関する一次資料が含まれている点が重要だろう。第5巻では、エラリー・クイーン・コンテストへの出品をめぐる資料や、引き続き探偵作家クラブ・捕物作家クラブの動静を伝えるものが多い。特に、乱歩が主導した黒岩涙香の三十三回忌（資料の多くでは「三十三周年」と表記される）を契機とした、涙香の顕彰に関わる事業の資料が豊富にある。そうしたことと同時に、乱歩自身が顕彰される側に置かれる事態も目立ち始める。本稿では、生誕地に記念碑が建てられたことと、乱歩の還暦をめぐる資料を中心に、「大御所」として作られていく作家・江戸川乱歩の像に触れてみたい。なお、「大御所」は第4～6巻を通して頻出する、乱歩に冠された形容である。

1952年12月付で江戸川乱歩生誕地記念碑建設有志会の建設趣意書が関係者に送付された(第5巻所収、5_054)。有志会は名張市の人びとによって構成されていたようである。その後、1955年11月3日に除幕式が行われ、この時の関連資料は第6巻に収められている。新聞記事や案内状はもちろんのこと、今も続く山本松寿堂(名張市)の乱歩せんべい「二銭銅貨」のラベルが貼付されていて、除幕式で名張を訪れた際に乱歩の手に入ったのだろうかと思像させる(6_051)。また、除幕式から3日間続いた、名張での講演や訪問のスケジュールを記した、直筆の便箋もある(6_053)。

「江戸川乱歩先生還暦祝賀会」に関する資料(第5巻)は、謄写版の「収支計算書」とは別に、原稿用紙に万年筆(筆跡から乱歩自筆と見てよい)で書かれた、会場への支払いに関する詳細、出欠者数の計算式や表、寄付者の名前と金額のリスト、それを踏まえて会費の金額を決定したものとおぼしき計算式などが確認できる。祝賀会の発起人には117名が名を連ね、さらに、探偵作家クラブ、捕物作家クラブ、廿七日会東京作家クラブの連名となっているが、実際の運営に際しては乱歩自身も相当繊細な気遣いを見せていたのであろう。他にも、祝賀会の式次第(謄写版)や席次(「TOKYOKAIKAN」名の方眼紙に手書き)など、充実している。

乱歩の人柄がよく伝わるのは、祝賀会参加者に乱歩が送った礼状関連資料である(5_154)。礼状を封入した封筒に加えて、礼状の文面の下書きあるいは見本とおぼしきものが貼付されているが、この礼状が多様なのである。発起人宛て、寄付者宛て、「再録原稿による」寄付者宛て、記念品を贈った人宛て、その他の参加者宛て、祝電を送った人宛て、メディアの依頼に応じて乱歩の還暦に際してコメントを出した人宛ての、実に7パターンに及んでいる。

これら祝賀会関連の資料は、乱歩のモノマニアックな側面の実際を示す一方で、平井太郎という人が有していた器の大きさや寛容さ——大きなイベントを他人に任せきりにするのではなく、会がつつがなく行われ、成功するためには作業を厭わないという態度や、多様な立場にある相手のそれぞれに対して、心を尽くして謝意を伝える繊細な気配りといったものをも照らし出している。

乱歩はこうして、存命中に記念碑が建てられるという珍しい作家となり、盛大に還暦を祝賀される「大御所」となった。しかし、ここで終わりではない。

1954年の資料には、「日本テレビ 近藤日出造似顔絵の時間」と添え書きのある、乱歩の似顔絵がある。

「日出造」のサインもあり、原本と推定できる(5_096)。ここに、乱歩が活字の世界を飛び出して、新しいメディアであったテレビの世界へと確かな歩みを進めたことが証されている。

あるいは、1956年2月27日付の、「前田隆一郎提出修士論文審査要旨」という謄写版がある(6_072)。前田隆一郎氏について管見の限りこれ以降の研究上の事績は確認できなかったが、審査者の筆頭に小川二郎の名前がある。小川は当時広島大学教授で、ワーズワースやウィリアム・ブレイクを中心とした英文学研究者だった。ゆえに、前田氏も広島大学に学んだものと推測される。前田論は、探偵小説が「トリックだけでは成立」しない「文学」であると定義づけたうえで、「今日最もすぐれた探偵小説家」としてチェスタトン、カー、そして乱歩を取り上げ、それらの作品を文学たらしめる要素を論じたものようである。今、手元には要旨があるのみなので、論文の詳細には手が届かない。しかしながら、こうして乱歩を対象に修士論文を書き上げる人物も現れたことには、作家としての乱歩の社会的な位相が、メディア環境だけではない場所にも用意されたことが示されている。

『貼雑年譜』は、日本の探偵小説の歴史、作家・江戸川乱歩の事跡、それらが常に社会の動向と関連していたことを伝える一次資料であると同時に、人間・江戸川乱歩／平井太郎の魅力を存分に伝える資料体でもある。